



健康と病いの語り ディペックス・ジャパン
がんの体験談を動画や音声でお届けしています

ネットの医療情報 見極める

自分や身近な人が病気になったとき、「まずはインターネットで症状や治療について調べる」という人は多い。だが、ネット上にある膨大な情報は玉石混交。間違った情報を信じてしまったり、見つけた情報でますます不安になったり。たくさんの「石」のなかから「玉」を見つけて出すにはどうすればいいの。

がんに関する情報提供を行っているNPO法人「がんネットジャパン」(CNCJ)は、2月、がん患者やその家族を対象に、ネット利用についてのアンケートを行った。その結果、がん治療に関する情報を、インターネットで入手した、と答えた人が8割近く(複数回答)にのぼった。

CNCJの柳澤昭浩理事は、「ネットの普及を考えると当然の結果。ただ日本では、検索エンジンで上位に並ぶのは企業や個人のサイトが多い。怪しげな治療法を勧めるサイトもあって問題だ」と話す。CNCJは3月、がん拠点病院へもアンケートを行い、「明らかに間違ったネット情報に関する相談を受けた」と答えた病院は半数を超えた。

CNCJでは、ネット上のがん情報が信頼できるかどうかについて▽誰が情報を書いているか▽いつ書かれたかがわかるか▽情報の根拠が示されているか、など6つのチェックポイントを提示。だが、柳澤さんは「これらのポイントをクリアできるのは、ごくわずか」と話す。それでも、探せば手軽に専門的な情報を得られるのは、ネットのメリットだ。

■ 体験者の語りを見る・聴く ■ 「健康と病いの語り」とは ■ 参加する・支援する ■ お知らせ ■ ディペックス



乳がん患者の語りを集めたディペックス・ジャパンのウェブサイト

根拠・発信源を確認 ■ 体験談を読み比べ

- ネットのがん医療情報チェックポイント
- ① 誰が情報を書いていますか？
 - ② 情報を書いた人と連絡が取れますか？
 - ③ 医療情報の限界について記載されていますか？
 - ④ いつ書かれたものか、わかりますか？
 - ⑤ 個人情報を守られていますか？
 - ⑥ 情報の根拠が示されていますか？
- (「がん情報.net」プロジェクトから)

(朴琴順)

財団法人日本医療機能評価機構(同千代田区)が運営する医療情報サービス「Minds」には、がんのほか、慢性腎臓病やせんそくなど、60以上の「診療ガイドライン」がまとめられている。

診療ガイドラインとは、臨床試験などの科学的な根拠に基づいて専門医らが作成した診断や治療の手順書だ。多くは主要な学会が公表しているもので、一般の患者向けもある。同サイトでは、病名などから検索もできる。

がんについては、国立がん研究センターが、患者向けにがん情報サービスを提供している。また、がんの新しい薬や治療法などの最新情報は、米国立がん研究所(NCI)が公開する最先端の研究成果が役に立つ。これは、がん情報サイトが、「PDQ日本語版」として日本語で公開、臨床研究情報センター(神戸市)の監修で毎月更新されている。同センター長で京都大学名誉教授の福島雅典さんは、「がんになったら、まず患者向けの部分を熟読して

- ◇ がんネットジャパン
<http://www.cancernet.jp/index.html>
- ◇ Minds
<http://minds.jcqh.or.jp/index.aspx>
- ◇ がん情報サービス
<http://gan.joho.jp/public/index.html>
- ◇ がん情報サイト
<http://cancerinfo.tri-kobe.org/>
- ◇ TOBYO
<http://www.tobyoy.jp/>
- ◇ ディペックス・ジャパン
<http://www.dipex-j.org/>

ほしい」と話す。ただ、これらの医療情報は正確ではあっても、あくまで「一般的」なものだ。「大事だと思ったところは印刷して主治医に見せながら相談してほしい」

手術の成功率や生存率などの数字を、どう判断すればよいのか戸惑う場合もある。さらに「専門家の言い分にも諸説あって、かえって迷う。そんなときに参考になるのは同じ患者の話だ」。ネットの闘病記プログラムを集めたサイト「TOBYO」を運営する三宅啓さんは、そう話す。

疑う目を持ち「魔法」探さない

京都大学大学院の中山健夫教授(健康情報学)は「ネットに限らず、まずは医療情報を判断し使う力、なす力を高めることが大切」と話す。

その情報の根拠は何か―疑う目を持たないと「薬を飲んだ。治った。だからこの薬は効く」という「た論法に引っかかってしまう。「これは『祈った』『雨が降った』『雨が効いた』」というのと同じ。雨がいならおかしなと思えるが、医療情報にも実は、こうしたものも多い。本当に効くかどうかを調べるためには、個人の体験ではな

く、きちんとした試験や研究が必要なのです」

もう一つ大切なのは、「100%効いて、副作用もない魔法の薬、魔法の治療法を探さないこと」という。正確な情報は、治る確率の高い治療を受けるための助けとなる。だが、医療に絶対はなく、どこまでも不確実性が残るものだからだ。情報を得たあと、その治療を受けるか、受けないかは、二つに一つ。中山さんは「そのときには、情報の正しさだけでなく、一人一人の価値観が問われている」と話す。

食品トラブル情報寄せて

データベースで公開

食品による健康被害、偽装表示、誇大広告……。消費者から寄せられた食べ物にまつわるトラブルをデータベース化し、インターネットで参照してもらおう「食の安全・市民ホットライン」を消費者・市民団体が立ち上げた。16日から情報の受け付けを始めていて、運営団体は「被害拡大を防ぐため、身近な体験でいいので情報を寄せてほしい」と呼びかけている。

日本消費者連盟や食の安全・監視市民委員会、おおさか市民ネットワークなど全国10の消費者・市民団体が運営。寄せられた情報は、美作大大学院(岡山県)の食環境科学研究室と連携して分析にあたる。

情報はファクス(03・5155・4767)かメール(office@fswatch.org)で。整理した後、ホームページ(<http://www.fsafety-info.org/>)に「食の不具合情報リスト」として載せる。

「リスト」には食品の種類やトラブル内容、購入場所を記し、メーカー・小売店の名や商品名は伏せる。ただ、すぐに注意喚起が必要なトラブルならメーカー・商品名の公表も検討する。